

## 仏教と環境問題

角 田 泰 隆

三界はすなはち心といふにあらず。そのゆゑは、三界は  
いく玲瓏八面も、なほ三界なり。

『正法眼蔵』「三界唯心」

### 一 はじめに

いったい私はここで何を批判しようというのか？

仏教？……そんなことはありえない。

環境問題？……いやそうではない。

本稿はそのどちらも批判するものではない。それではいったい、  
なぜ「批判」なのかと言えば、本誌には、創刊号より「論文」「書評」  
「学会動向」「批判」「虚構」の五つのジャンルがあり、編集者によつ  
て、おそらく常識的に、つまり、本稿は他の四つのジャンルには決  
して入り得なかつたので、「批判」というジャンルに収められたから  
である。

であるから、「批判」とはいえ、本稿は、仏教について、あるいは  
環境問題について、その善し悪しを言おうというのではない。仏教  
は私の信仰するものであり、生きる指針であり、環境問題への取り

組みは今や私のライフワークにもなっているものであり、批判の対  
象にはなりえないものである。私にとっては、環境問題を考えるこ  
とが仏教の教義とひとつであり、環境改善のための実践が仏道の大  
切な実践なのである。

もつとも、前者においては仏教とは何かを論ずることが重要であ  
ろうし、後者においては皮相的な取り組みもあれば深層的な取り組  
みもあり、その取り組み方が重要であろうから、これらについても  
明らかにされなければならぬであろう。

そのようなわけで、本稿は「批判」には当てはまらないかもしれ  
ないが、あらかじめ提出していた論題が「批判」のジャンルに収ま  
ったことを確認してから執筆を開始することになった今、多少なり  
とも「批判」めいたことを冒頭に挙げておかなければならないよう  
な思いもするので、あえて言えば、本稿が何らかの批判を内包して  
いるとすれば、それは仏教に関わらなければ環境問題に取り組み  
いと言わんばかりに、その関係を問題とし、環境問題への取り組み  
に何が何でも仏教の教義的裏づけが必要であると頑なに思っている  
人々、つまり、仏教と環境問題をあえて結びつけなければならない

とする人々に対する遠回しな批判であり、そして、環境問題を至上のこととするあまり、仏教を知り得ずして、宗教や仏教を有害なもの、とまでは言わずとも無用のもの、あるいは全く関係のないものとする一部のエコロジストに対する批判であろう。

そして、環境問題を論じているこの私自身、これまで、世界の、殊に発展途上国の……このような言い方も我々の側の言い方であるのだが、その……人々の生活を変え、環境を大いに破壊してきたところの、いわゆる文明社会の……いったい何が真の文明かわからないが、その……側に身を置いている者にとつての環境問題であり、おそらく何かが抜け落ちていくに違いないことへの自己批判を含むものでもあるのである。

エコロジ―は今や「時代のトレンド」と言われるようになった。多くの企業は、地球環境保全の高揚を新たなビジネスチャンスととらえ、商戦を展開し、「エコビジネス」などという言葉まで生まれている。「環境にやさしい」とか「からだにやさしい」ということは悪いことではない。しかし、それをキャッチフレーズにした数多くの商品の中に、いったい本当に「環境にやさしい」「からだにやさしい」商品が何割あるのだろうか。

古紙の回収をボランティアで熱心に行いながら、再生紙のトイレットペーパーは高いからと買わない人。リサイクルは大切だと、スーパーマーケットの自動回収機にアルミの空き缶二つ入れて一円を受け取り、アルミ缶に入った清涼飲料水をまた何本も買っていく人。そのようなエコロジストがいくら増えても環境問題は解決しないだろう。もっと根本的な問題に目を向けて、地球環境の実態と予測される未来を知り、速やかに価値観の転換をはからなければならぬ。

## 二 環境問題とは何か

環境といえば「エコロジ―(ecology)」と一般的に言い換えるが、エコロジ―とは、通常「生態学」と訳される、生物学の一分野の学問である。エコロジ―という名の名付け親は、一九世紀中葉のドイツの生物学者E・ヘッケルであり、その著作『自然創造史』の中で用いられたÖkologie(やり繰り)……食物連鎖のシステムとしてのやり繰り……という造語に由来すると言われ、「生物と環境および共に生活するものとの関係を論ずる科学」とも定義されている。

また、このエコロジ―の語源は、ギリシャ語のオイコス(oikos＝家)＋ロゴス(logos＝法則・原理)で、家の法則、つまり地球という家がどのような法則でなりたっているのかを扱う学問であると言われる。

ところで、システム理論家のフリッツョフ・カプラは、エコロジ―について次のように言う。

地球という家で生活を共にするあらゆる構成員の相互関係を調べるのがエコロジ―だと言える。近代自然保護運動の父ジョン・ミュアは、「何かをそれだけ拾いあげようとしても、かならず宇宙の他のすべてのものとながっている」と語った。つまり、エコロジ―とは「ものごとの結び付き」の研究、相互関係性の研究を指している。『ディープ・エコロジ―考―持続可能な未来に向けて―』（平成七年六月、佼成出版社刊）

これに従えば、エコロジ―とは相互関係の研究であり、まさに仏教が説く縁起説と結びつくものである。縁起とは文字からすれば「縁りて起こる」ということであり、つまり「これ生ずれば、かれ

生ず。これ滅すれば、かれ滅す」という時間的縁起（因果関係）と「これあれば、かれあり。これなければ、かれなし」という空間的縁起（相互関係）、すなわち、万法（あらゆる存在）の時間的因果関係と空間的相互関係を示すものと私は理解している。ゆえに私にとって、環境問題の惹起は、仏教の説く縁起そのものの結果であり、環境問題の解決は仏教の説く縁起そのものの結果としてあり得るのであると、そう言えるのである。

ところで、環境問題を考える場合、宇宙的スケールで地球と人類の存在を考え、現代を分析することが必要となる。惑星科学を専攻する松井孝典氏は次のように言う。

地球環境問題を考えることは、文明の本質を問うことであり、人間のレゾンデートルを問うことであり、太陽系では生命の住む唯一の惑星である地球の起源と進化を明らかにすることである。地球と人間のつきあい方を探るには、これらを総合的に論じなければならぬ。（松井孝典著『地球Ⅱ誕生と進化の謎―最新地球学入門』、講談社現代新書、四頁）

このような視野をもって環境問題を論じなければならぬとすれば、私には容易なことではないが、確かに、環境問題とは我々人間がそのレゾンデートル（存在理由）を自ら問うことであり、いったい文明とは何かというその本質を問いかけることなのであろうと思われる。いったい人間とは何か、文明とは何か、次の譬はおもしろい。

ある日、池の鯉に知恵がついたとする。そして、池の水から麩を製造する機械を発明したとする。鯉はその機械を毎日運転して、好物の麩をたらふく食って大喜びしていた。ところが大

変。しばらくするうちに鯉は息苦しくなってきた。いつのまにか、無限にあると思っていた池の水が少なくなってしまうたのである。それと同時に、機械ができる前に食べていたプラントンも少なくなってきた。機械を止めれば遠からず餓死。運転しつづければ、遠からず、池が干上がって窒息死。

人間と文明と自然環境の関係は、ほぼこの鯉と麩製造器と池の関係に等しい。まだ絶体絶命の窮地というところまではきていないらしいが、そこまで行きつくのにそう時間はかからないだろうと思われる。生態学的視点が欠如していた結果である。

立花隆著『エコロジー的思考のすすめ―思考の技術』（中公文庫）\*本書は、一九九〇年一二月に刊行されたものであるが、もとは『思考の技術・エコロジー的発想のすすめ』と題されて一九七一年五月、今から二十六年前に、日本経済新聞社より刊行されたものを改題し加筆したものである。その内容は、そのような古さを感じさせない。

また、人間に対する次の風刺もおもしろい。

宇宙パトロールの報告

巡查…知性生物のいる惑星を発見、その名はテラ（地球）。よく観察すると不思議なことがあります。その知性生物が、自分の星を破壊しています！

長官…詳しく報告せよ。

巡查…酸素呼吸型生物なのに酸素ポンベ（森林）を破壊しています。紫外線に弱いのにシエルター（オゾン層）を破壊しています。

長官…何かの間違いではないか？ 何か特別な目的があるの

ではないか？

巡查：間違ありません！ 確かに彼らはテラの生命維持装置を破壊しています！ このままではテラが滅びます！ 何をすべきか、指示してください！

長官：あらゆる点から考えて、それはテラの知性生物ではない。つまりテラは今、エイリアン（異星人）に侵略されているのだ。テラを守るために、君はそのエイリアンを一掃せよ。

巡查：アイ、アイ、サー！（了解）

（高木善之著『地球大予測』、一九九五年一月、綜合法令刊）

ほんとうに我々は、我々自身の存在理由を自ら問わなければならない時にきているのかも知れない。我々は、地球を破壊し、自らをいずれ滅亡させるために存在しているのか、それとも……。

### 三 地球環境の現状と予測される未来

地球環境の変化について科学者から警告が発せられたのは、もう二〇年以上も前のことである。

約四億年前に生命が陸上へ進出し、今まさに宇宙へ進出しようとしているその時、地球そのものを一つの生命体として宇宙から地球観測が行われるようになってから、その観測データによって、地球環境の急激な変化が知られるようになったからである。

「二〇年以上も前のこと」と言ったのは、その後さしたる改善も行われずに現在に至っているからであるが、地球環境に急激な変化が現れだしたのは産業革命以降のことであるものの、そもそも、さ

らに一万年以上に遡る、人類史の上での大きな転機から、環境破壊は行われていると言われるのである。

人類史のうえで転機が訪れたのは約一万年前である。この時人類は農耕をはじめた。農耕とは、地球の生態系とは異なる人工の生態系をつくりだすことである。そのために食料が確保され、この時から人類のより安定した生存が保証されることになる。人工の生態系を拡大するためには、地球（自然）を知り、それを征服することが必要である。そのために文明が生まれた。文明とは、その発生時から地球と敵対する宿命にあったといえよう。文明の盛衰の歴史はそのまま環境問題に集約できるのではなからうか。

一万年前、人類は地球を食いつぶすことで自らの繁栄をきずくという道を選択した。その延長線上に現在がある。これまでの文明はその規模がローカルであったために、その本質が問われなかっただけのことである。ところが現代文明はその維持と発展のために、巨大なエネルギーと物質を消費する。一方で人類の生存はより確かに保証され、人口が急激に増加し、地球の生態系のなかで突出した存在となった。その結果、現在の地球環境問題が生じたと言える。（前出松井著書、一〇頁）

農耕の始まりが、環境破壊の始まりだからといって、我々はこれを放棄することはできない。ただ、我々の存在が、他の動植物と違い、我々人間が存在するということが環境を破壊することであり、文明の発展がそのまま環境破壊であるということを認識していなければならぬ。そのような人間の存在の本質や、文明の本質を認識したうえで、来るべき未来に向かって最善を尽くさなければならぬ

いのであろう。まさに人類は今、重要な岐路に立っているからである。

二十一世紀を目前にして、私たち人類は今、重要な岐路に立っている。この岐路は現在、進行中の地球環境の破壊を食い止めることができないまま滅びの道を急ぐのか、それとも総力をあげて破壊を防ぎ、さらに修復して明るい未来に連なる道を見いだすことができるのかという歴史の転換点である。(川名英之著『地球環境「破局」』、一九九六年七月、紀伊国屋書店刊、プロローグ、一頁)

ここ数年、すこしばかり、地球環境のことについて勉強した私であるが、この川名氏の言葉は決して大袈裟なものではないと感じる。地球環境の実態を知られば知るほど、「滅びの道」に向かいつつあるのではないかと暗い気持ちになる。

ところで、これまでの私は、このようなことを夢にも思わず、大きな誤解をしていた。川名氏が、次に指摘する通りの誤解である。

人は、とにかく科学技術のめざましい進歩によって、すばらしい未来が切り開かれ、来世紀にはいっそう豊かで、快適な社会が実現できるのではないかとという夢を抱きがちだ。その場合、地球という小さな惑星がもつ環境容量が世界人口の爆発的な急増にどこまで耐えられるか、開発途上国の経済成長が進んで現在の先進国並みの消費レベルに達したときの生態系や大気・水質の保全、資源・食糧の確保ができるのかという問題を考慮に入れていないように思われる。(中略)地球環境の容量内にとどめることこそ、地球号の乗員が絶対的に守らねばならない規範である。環境容量を無視し、生態系を破壊するような開発行為

は地球環境に破局をもたらし、人類の生存を困難にする。(同右) 科学技術のめざましい進歩によって、すばらしい未来が切り開かれ、来世紀にはいっそう豊かで、快適な社会が実現できると、私もそう思っていた。しかし、地球の容量ということを考えて、つまりそれは地球の容量内にとどめざるを得ないことを考えると、それが不可能であることを容易に知りうるのである。

そればかりではない、逆に、地球環境の実態を知られば知るほど、未来がいかに苦悩に満ちたものであるかを確信(?) することになるのである。

レイチェル・カーソンの『沈黙の春』に、

現代の社会から、化学的発癌物質をせんぶとりのぞけるだろうなどと考えるのは、あまりにも非現実的と思われるかも知れない。だが、その多くは、私たちの生活に不可欠なものとはかぎらない。それらをとりのぞけば、私たちの上にのしかかる発癌物質の圧力も大幅に減り、四人に一人がいずれ癌になるという脅威も、少なくとも大幅に弱まるだろう。不退転の決意をもってなすべきことは、何よりも、発癌物質をとりのぞくことだ。私たちの食物、私たちの水道、私たちのまわりの空気……すべてが発癌物質で汚染している。食物、水、空気、どれも私たちがいつも身にふれるものであれば、危険このうえなく大きい。ごくわずかずつ、くりかえしくりかえし何年も何年も私たちのからだに発癌物質がたまってゆく……。 (中略) いますでに癌にかかっているもの、また本人は気づかなくともすでに癌をからだのなかにかかえているもの、こういう人たちのために薬や治療法を見つけることは、いうまでもなく必要だ。だが、まだ癌

の魔手がとどいていない者……そして、まさにまだ生まれ出てこない未来の子孫たちのために、何としても、癌予防の努力をしなければならぬ。（レイチェル・カーソン著・青樹築一訳『沈黙の春』、昭和四十九年二月、新潮社刊）

と書かれている。三十五年前にレーチェル・カーソンは「四人に一人がいずれ癌になるといふ脅威」と言っている。彼女は、将来においてそのような事態になりうることを予想していたのであろうが、おそらく彼女にとってその予想は極めて深刻な事態なのであり、ゆえに「脅威」と表現したのであろう。しかし今、それが現実となっている。

いま日本では国民四人のうち一人ががんで死亡している。一九九四年に零歳である人ががんで死亡する確率は男二六・九九パーセント、女一八・〇五パーセントである。長い間、がんを患い、亡くなるときに他の症状、たとえば心疾患とか肺炎が現れると、それが死因とされるが、実質的にはがんによる死亡である。こうした実質的ながん死を合わせると、がんのために死亡する人の割合は国民三・五人のうち一人くらいになるだろう。がん死が死因の中でこれほど大きな割合を占めるようになったのは最近二十〜三十年のこと。がんはなぜ、こんなに急増したのか、それは環境が汚染されたためと考えるのが自然である。（川名英之著『地球環境破局』、一九九六年七月、紀伊国屋書店刊）

私はこの事実を重く受け止めている。それは、現在における科学者の未来の予想も、かなりの確率で当たるであろうと思われるからであり、予想以上に深刻な環境の悪化があり得るであろうと考えら

れるからである。そのことを念頭に、以下の地球環境の現状と予測される未来を受け止めなければならない。

数ある地球環境問題の中で最も緊急の課題がオゾン層破壊問題であるといわれる。

オゾン層は、対流圏（地表から約一〇キロメートルくらい）の上の成層圏の下部にある。その総量は三三億トン程度であり、地上の気圧（一気圧）に換算すると約二ミリメートルほどの厚さしかない。オゾン（ $O_3$ ）は、二酸化炭素（ $CO_2$ ）が酸素（ $O_2$ ）になる時、およそ百万分の一の確率で出来る非常に不安定な物質であるといわれ、生物に有害な紫外線B（DNAを傷つける）をカットする働きをもつ。約四億年前に、酸素が大気中に充分たまった後、このオゾンの層ができ、生物の陸上での生存を可能にしたと考えられている。いや、生物が海から上陸するその頃、大気にオゾン層が形成されていたためそのような環境に適応するかたちで生物が海から上陸したとも考えられる。いずれにしてもあらゆる生物は、オゾン層によって紫外線Bがカットされた環境に適応しているのである。

それが近年、南極上空にオゾンが著しく少なくなった領域（オゾンホール）が、南極大陸の面積の約一・五倍に広がっており（一九九五年九月二日、日本経済新聞）、北半球の高緯度域は、昨年二月から三月にかけて二〇〜三〇％オゾン層が減少（一九九六年六月二九日、朝日新聞）し、現在日本上空でも八〜一五％減少、北海道上空で一二％減少（一九九七年五月一〇日、朝日新聞）しているとい

う。オゾン層が減少すると、有害な紫外線（UV-B）が増加し、その結果、人体には皮膚ガンの増加や、視覚障害、免疫機能の低下等

の影響があらわれ、また、陸上では植物が影響を受け（農作物の収穫量の減少）、海中ではプランクトンが減少してその生態系に大きく影響する。

オーストラリアのクインズランド州の州都ブリスベーン市では、子供たちに皮膚ガンや眼の病気（白内障・失明）が急増しており、また、南半球の高緯度地域では、昆虫（目が見えない）や植物（発芽しない）にも悪影響がでていくという。

やはり、オーストラリアのクインズランド州では公園や学校の運動場が直射日光を九〇%遮断するテント屋根で覆う措置がはかられたり、私立聖オリバー・プランケット小学校では、一九九四年から「制服」の一部としてサングラスを採用。小学生全員にUVローション（日焼け止めクリーム）や首筋を守るための帽子を配り、直射日光を避けるよう指導し、午前一〇時から午後二時までは野外授業を避けている。これは、遠い南の国の出来事ではなく、日本上空においてもオゾン層破壊の状況は大差はないのである。

オゾン層破壊の原因はフロンである。フロンは一九二八年に発明され、安全性が高く（燃えたり爆発したりしない）、安価な化学物質として一九六〇年代から大量生産された。その用途は冷却（冷媒）、洗浄、発砲、エアゾール等である。この物質の危険性がわかったのは一九七二年（アメリカの科学者ローランド博士・モリーナ博士による発表）のことであり、一九八五年に南極にオゾンホールが発見されて、世界は事態の重大さに気づいた。

フロンは、空気より重い物質であるため、オゾン層に到達するに是一年以上かかると言われる。フロンは触媒反応をおこしながらオゾン層を破壊するが、その破壊率は一〇万倍といわれる。地上で

大気中に放出されたフロンがオゾン層に到達するまで約一五年かかるとされるので、これまでにオゾン層を破壊したのは一五年以上前に放出されたフロンで、すでに製造したフロンの一〇%にあたるものだという。そして八〇%が既に大気中に放出されている。本格的な、深刻な被害がでるのはこれからである。

次に地球温暖化問題であるが、これは環境問題の中でも、最も重大な問題であると言われる。

地球の気温は、太陽から入ってくる光の量と、その結果暖まった地表の熱を宇宙に放出する熱の量によって決まる。熱の捨て方は、大気中に含まれる水蒸気や二酸化炭素などの量で決まっているが、これらが地表からの熱放射を吸収し、逃がさない性質をもつからである。これら二酸化炭素・メタン・一酸化窒素・フロンなどを「温室効果ガス」と言う。

温暖化が進むと、海流や風、降水量やそのパターンの変化、地表の乾燥、水資源、耕地、森林などの分布の変化、農作物の生産量の変化、海の膨張、極地の氷の融解など、幾多の変化を誘引する。海の膨張、極地の氷の融解を例に取れば、これによって海面の上昇を引き起こし、低海拔地域が水没・海岸線の浸食（世界の三六ヶ国は国土の大半が水没）が起こると予測される。

地球温暖化の主たる原因は、かつて大気中にあった二酸化炭素を地球生命が大地に固定したものを、人類が化石燃料として利用し、短期間に大気へもどしつつあるのが主たる原因である。

一万年間二八〇ppm（氷河期は二〇〇ppm）で安定していた二酸化炭素濃度は、産業革命以後、徐々に上昇しはじめ、次第に加速し、現在は三六〇ppmに達している。二〇一〇年間の増加八〇ppm

は、氷河期と温暖期との差と同等である。

氷河期から現在までに地球の平均気温は四・五℃上昇しているが、そのうち〇・五℃は過去四〇年間で上昇している。平均気温〇・五℃の違いの大きさは、子供の頃と現在の寒さを比較すれば明白である。今後一〇〇年で約三℃上昇の見込みであるというから大変なことである。日本が亜熱帯になり、米の栽培が西日本で難しくなり、また、あらゆる穀物の収穫量が半減し、世界的規模で食糧危機が起こることが予測されている。そして、一〇〇年後、海面が六五センチ上昇（一九九〇年の「気候変動に関する政府間パネル」の報告）すると、人工埋立地の液化化現象、地下水の上昇、海水による塩害等により、特に平野部の農業は大きなダメージを受ける。このことは人口爆発（後述）と相俟って世界的食糧危機をまきおこす。また、地球温暖化により南極半島のウェッデル海に面したランセン棚氷の一部が崩壊し、巨大な氷山となって外洋に向かって漂流を始めている。氷山の大きさは厚さ約二〇〇メートル、面積は二九〇〇平方キロで、淡路島の約五倍（一九九五年三月、東京新聞）であるという。これが海に落ちれば全世界の沿岸を巨大津波が襲うかも知れない。石油コンビナートや原子力発電所を破壊すれば、一瞬のうちに大惨事となる。これは、地球上生物の死滅を意味する。

ところで、地球の人口が急激に増えていることはよく知られている。

一〇〇万年前に約一〇〇万人だった世界人口は、一万年前には約一〇〇〇万人、西暦元年に約一億人、一〇〇〇年に約二億人、一五〇〇年に約五億人、一八〇〇年に約一〇億人、一九〇〇年に約一五億人、一九九〇年に約五五億人と増え続け、そして現在、約五七億

人、なんと今、一年間に九〇〇〇万〜一億人増加しているといわれる。

この事実だけみても、先進国を含めた世界的食糧危機がおとずれすることは必至である。人口増加に悩む中国では「二〇一〇年には三億人分の食糧が不足する」と発表しているし、これと同じことが、アフリカ諸国やインド等でも起こると予測される。朝鮮民主主義人民共和国の食糧危機は周知のとおりである。

現在、世界では一五億人の人が一日一食の生活を送っている一方で、日本では依然として飽食の生活が続けられている。最近、

「輸入してまで食べ残す、不思議な国・ニッポン」

という公共広告機構の広告を眼にするが、その片隅に、「台所のゴミの約四〇％が「食べ残し」によるもので、まったく手つかずの食品がまるごと捨てられているケースが何と一四％もある」と書かれていた。日本の食糧自給率は約三〇％、これは他の先進国に比べて極端に少ない。ちなみに日本のエネルギー自給率は九％、これは無いに等しい。

オゾン層破壊、地球温暖化、森林破壊、人口爆発、海洋汚染、酸性雨などなど、これらが複合的に起因して、必ずおとずれるであろう世界的な食糧危機。日本は最も危険な国である。

化学物質による汚染も深刻である。天笠啓祐氏は「便利なものには毒がある」という。

かつて人間が開発した軍事技術の中でも最も危険性が高く非人道的とされてきたのが、ABC兵器といわれるものである。

Aは核兵器（アトミック・ウェポン）、Bは生物兵器（バイオ・ウェポン）、Cは化学兵器（ケミカル・ウェポン）のことであ



る。第二次世界大戦が終了した後、これらの兵器の技術はそれぞれ「平和利用」という名のもとに商業利用の道をたどることになった。

すなわち核兵器は原発として、生物兵器はワクチンとして、化学兵器は農薬として、主要な用途を見出してきたのである。しかしこうした極めて危険性が高い軍事技術の商業利用は、結局、環境汚染や大規模災害という形で人々の生活や生命を脅かすことになった。

原発は日常的に放射能汚染をもたらしているだけでなく、いったん事故が起きるとチェルノブイリ事故に代表されるように地球規模で環境を破壊する。また、細菌兵器の開発から誕生したワクチン・メーカーは薬害や医療被害を多発させ、化学兵器の技術を利用した農薬の散布は毒ガスが広く薄く撒かれた状態と同じであることから、生産現場の労働者をはじめ使用する農家、最終的には消費者に至るまでがその悪影響下におかれることになった。(天笠啓祐著『危険な暮らし―猛毒物質・病原菌ファイル』、一九九六年一〇月、晩聲社刊、三―四頁、「はじめに」)

化学の進歩につれて、私たちが未知なる危険が取り巻きつつある。遺伝子組み替え作物(遺伝子(DNA))の中に人工的に他の生物のDNAの一部を組み込むことで、新しい性質をもつように作り換えられた作物のこと。従来の品種改良とは異質のもので、自然の中では起こりえないことを人工的に行っている)の問題、そして電磁波の問題、食品の安全性の問題、私たちを取り巻く種々の化学物質の問題等々。

明確な危険性が証明されていない今、過剰な反応はやめたいが、

仏教と環境問題(角田)

しかし「慎重なる回避」(ブルーデントアボイダンス)あらゆる危険をはらんだものに対するスウェーデンの基本的国策)をしたいものである。

さて、地球環境の実態が深刻なものであることは、二三の問題を取り上げただけで、明白である。ここに挙げたオゾン層破壊、地球温暖化の問題のみならず、森林破壊、人口爆発、海洋汚染、酸性雨、生物種の減少、砂漠化、有害廃棄物、食品添加物や農薬などによる体内汚染、食糧危機などなど、どれ一つをとっても人類の未来は明るくない。そして実際はこれらの問題が複合的に我々の未来を襲うのである。

人類は、英知をあつめてこれらの問題を解決しなければならぬ。もちろん科学技術による解決も必要であろうが、我々が価値観の転換をはかることができるかどうか、重要なポイントになるであろう。

#### 四 価値観の転換

価値観の転換は、たやすいことではない。

モーゼは、エジプトの奴隷であったイスラエル人をひきいて、約束された豊饒の地カナンに向かう途中、四〇年間にわたって荒野をさすらわねばならなかった。なぜかといえば、カナンはヤハウエ(エホバ)の神の地であるのに、イスラエル人は奴隷時代に信仰した金の仔牛の神、バール神への信仰を捨てきれなかったからである。ヤハウエ神は、彼らを四〇年間荒野をさすらわせる間に、彼らの信仰(思考)様式を徹底的に叩き直そうとし、それについて来られない者は地獄の火で焼き殺した。そ

して、頭の中がすっかり変わったことを確かめてから、カナン  
の地に入ること許したのである。

われわれが直面している事態も、まさにこれである。下手を  
すれば、脱工業社会にはいる前に何十年かにわたって荒野をさ  
すらうか、地獄の火で焼かれる恐れがある。（前出立花著、一〇  
頁）

人類がベターな道を選択するとすれば、やはり「脱工業社会」を  
めざさなければならぬと私も思ふし、今後はよりローカルな範囲  
での自給自足の自立社会の確立が必要となろう。地球の裏側から資  
源や食料を運搬することはエネルギー問題のうで不可能となるか  
らである。もしかすると我々は主体的に価値観を転換していくの  
はなく、外的要因（化石燃料の枯渇等）によって否応なく価値観を  
転換せざるを得なくなっていくのかもしれないが、それではより苦  
悩が大きであろうから、その前に、前向きな価値観の転換が、つ  
まり、智慧と良心と信仰とによる価値観の転換が望まれるのではな  
いかと思ふ。しかし、それにしても、「もつと豊かに」「もつと便利に」  
「もつと快適に」と追い求め、「経済は限りなく成長しなければなら  
ない」と思いこんでいる我々に、大きな苦悩が伴うことは間違いな  
いであろう。

ところで、倫理的な視点から環境問題を論じたものに、加藤尚  
武著『二十一世紀のエチカー・応用倫理学のすすめ』（一九九三年一  
月、未来社刊）の中の「II 地球環境の危機と対応」がある。

倫理学の中には種々の倫理学があるという。生命倫理学、環境倫  
理学、戦争倫理学、情報倫理学、研究倫理学、ビジネス倫理学など  
など。これらは「応用倫理学」（アプライド・エシックス）と総称さ

れている。原理があるから応用があると我々は考えるが、どうも倫  
理学には確たる原理があるわけではなく、学者がとりあえずつくり  
だしている原理であるという。この中の生命倫理学と環境倫理学に  
ついてみてみよう。これがおもしろい。

生命倫理学の原理は、こうである。

- ① 判断能力をもつ成人は、
- ② 自己の生命を含めて、あらゆる「自分のもの」について、
- ③ 他者に危害を加えない限りで、
- ④ たとえ結果として当人の不利益になる場合でも、
- ⑤ 自己決定の権利をもつ。

たとえば、大人が宗教上の理由で輸血を拒否するなら、それ  
が当人の不利益になることがはっきりしている場合でも、その  
拒否権を尊重するという考え方だ。個人主義・自由主義の原理  
である。

環境倫理学の原理は、一種の全体主義である。

- ① 地球の生態系という有限空間では、原則としてすべての行為  
は他者への危害の可能性を持つので、倫理的統制の下におかれ
- ② 未来の世代の生存条件を保証するという責任が現在の世代に  
ある以上、
- ③ 生物種、生態系については、人間は自己の現在の生活を犠牲  
にしても、保存の完全義務を負う。

自分自身のことについて他人の意志で取り仕切られたのでは  
たまらないという感情が、生命倫理学の下地にある。地球の全  
体、未来の世代、人間以外の生物の生存にたいする責任が現在  
の人間にあるという見極めが、環境倫理学の土台になっている。

どちらも正しいが、原理としては両立できない。この対立関係が、現在の人類の生き方の総決算になるとみてよいと思う。(一〇四―五頁)

生命倫理学と環境倫理学について「どちらも正しいが、原理としては両立できない」と言う。個人主義(自由主義)と全体主義、この両者のバランスをどうとるのか、あるいはどこに接点を見いだせるのか、環境問題の解決と相まって人類の英知をあつめて最善の道を選択しなければならぬ。

私には前者より後者をより重んぜざるを得ないように思われるが、ここで全体主義的な原理を重んじるべきだと言っても、この全体主義的な原理を押し進め統制する者の中にも、個人主義的な考え方が入り込む大きな危険性もあることは、認識しているつもりである。

とは言え、筆者がより重要であると考える後者について、さらに紐解くならば、この環境倫理学の基本的な考え方は、次の三つであるという。

①人間だけでなく自然も生存の権利をもつ(自然物の生存権)。  
②現在の世代は未来の世代の生存可能性をせばめてはならない(世代間倫理)。

③地球の生態系の保存が他の目的よりも優先する(地球全体主義)。(一一二―二頁)

ここから出てくる結論は、現在の世代はその繁栄を犠牲にしても、人間以外の生物の保護と未来の人類の生存可能性を保証しなければならぬということであるという。

はたして我々は、他の生物種のために、そして未来の人類のために、現在の自らの繁栄を犠牲(?)にできるだろうか。

今、我々は、地球が何億年もかけて生み出してきた化石エネルギーをすべて掘り出して使い果たそうとしている。このことが地球を暖めて、未来の人類を苦しめるであろうことを知りながら、そしてこの有限である化石燃料が現在において最もすぐれたエネルギー資源であり、これをできるだけ遠い未来の人類に(これも人間中心主義か?)分け与えて、より限られた有効な利用をすべきだとは思いますが……。しかしながら、今の自分の(もちろんこの私自身も含めての)便利快適さのために「わかっちゃいるけど止められない」で使い果たそうとしている。

現代文明の発展は、化石エネルギーの消費とともにあった。それが一つの要因になって環境問題を生みだした。この化石エネルギーの消費の制限が、いま急務なのであろう。そのためにはとにかく、その一つの実践として、自動車等の利用をなるべく控えることと電気製品の利用の制限がとめられる。しかし、便利な自動車や、快適なクーラーの味を覚えた我々に、これをすすんで捨てることのできるだろうか。

先年、フランスと中国で相次いで核実験が行われた。世界で最も豊かな国のひとつフランスと、二〇一〇年には約三億人分の食糧が不足するであろう」と予測している中国においてである。日本はこれに対し「遺憾の意」を表明したが、このような時期に両国で核実験が行われたことの意味はいったい何であろう。今後、資源問題において国家間で紛争が起ることは容易に推察される。近いうちに(この二〇年以内であろうとも言われている)オイルショックならぬオイルストップが起る可能性が高いと言われるが、その時に核を保有しているかどうかはものを言うとも言われる。そのようなこ

とは私のような素人でも納得ができる。資源問題がきっかけとなり、武力による争いが充分起こりうる。まさか核戦争までには発展しないが、その時に核は、資源問題の小競り合いの最大の抑止力になるに違いないであろう。フランスは武力による食糧の略奪を免れるであろうし、中国は核を保有していることによって、日本に石油が入らなくなってからも石油を手に入れ続けるかもしれない。日本が、核を保有せず、そして他国の核実験を大いに非難することは正当であり当然のことであると思うが、それにしても両国の核実験の意味の認識がなされているのであろうか。つまり、「遺憾の意」を表明しながらも、安閑とエネルギーや食糧の最大級の消費国であり続けていること、そしてこれからもあり続けようとしていることが大きな問題なのである。これは、なにも、日本の政治家の責任だけではない。我々国民が反省すべきことであらう。

核実験反対！と叫びながら、便利快適な飽食の生活をあたりまえのこととしている人。古紙回収のボランティアを熱心に行いながら、再生紙のトイレットペーパーは高いからと言って買わない人。コープのアルミ缶の自動回収機にアルミ缶二つ入れて一円受け取って、また缶ジュースや缶ビールをかごいっぱい買っていく人。世の中にはこのような人が多い。程度の差こそあれ、私もその一人かもしれないが。

とにかく今、「環境問題」の解決ができなければ、人類はいずれ「資源問題」で血を流すことになる。元ユーゴスラビアで起こったような「民族浄化」という殺し合いが世界のあらゆるところで発生するだろうと言われる。そうなる前に、環境問題という形で、理性的に解決した方が人間の人間らしさにふさわしいと加藤氏は言う。

人間が人間らしい道を選ぶために、仏教は何らかの力となれるのだろうか。

## 五 おわりに

仏教と環境問題と題しておきながら、とりとめのないことを述べているうちに制限時間を使い果たしてしまった。これから速やかにこの原稿を提出しなければならぬ。予定では、五 仏教と環境問題があつて、六 おわりにでまとめるはずであった。仏教と環境問題と題しておきながら、両者の関係を論ずることなく終わってしまった。本稿は未完である。

ただ、未完であるがゆえに、かえってその目的がはたせるのかもしれないなどと、負け惜しみを述べて筆を置きたい。

その前に、冒頭に、

三界はすなはち心といふにあらず。そのゆゑは、三界はいく玲瓏八面も、なほ三界なり。

という『正法眼蔵』「三界唯心」巻の言葉をおくことにした。この巻は、三界（全世界）と心が一つであることを述べた巻で、これがキーセンテンスであると私は思っている。三界はあくまでも三界であり、心はあくまでも心である。両者を結びつける必要などない。そのことが三界唯心ということなのである。

もしかすると、時間があれば述べようとした仏教と環境問題の密接な関係は、それを論じてしまえばまさしく蛇足となったのかも知れない。

すでに仏教と環境問題との関係は少なからずの学者によって論じられている。たとえば、前出『ディープ・エコロジー考』の末尾の

解説では、四諦説や八正道と絡めて環境問題を論じ仏教の果たすべき役割の大きいことが強調されている。そこには、環境問題の立場に立った恣意的な解釈も多少見られるが、それはそれで一つの解釈であり、意義あることである。しかし、

仏教はあくまでも仏教であり、環境問題はあくまでも環境問題である。

そして、そのように言う私にとって、仏教を信仰している私にとって、環境問題と積極的に取り組むことがライフワークの一つになりつつあるのである。(未完)

(一九九七年七月十日)